

# 七 万葉包み

TPOに応じて変化する包み

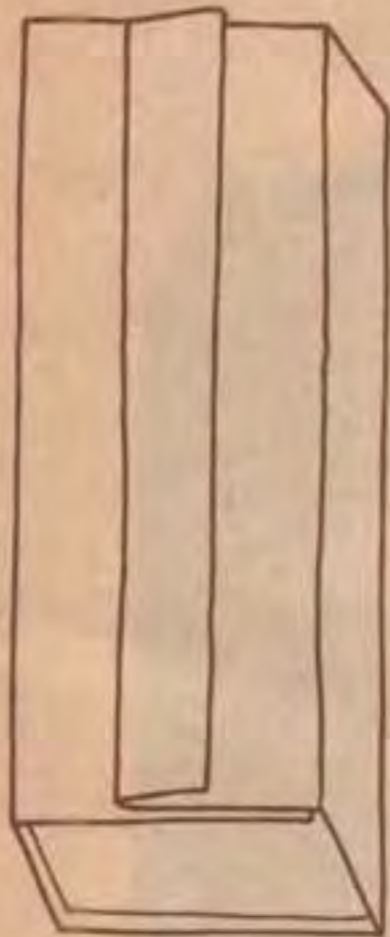
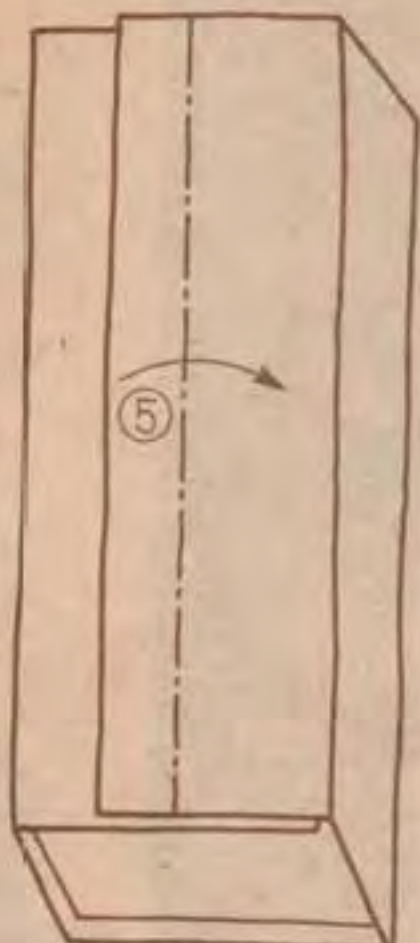
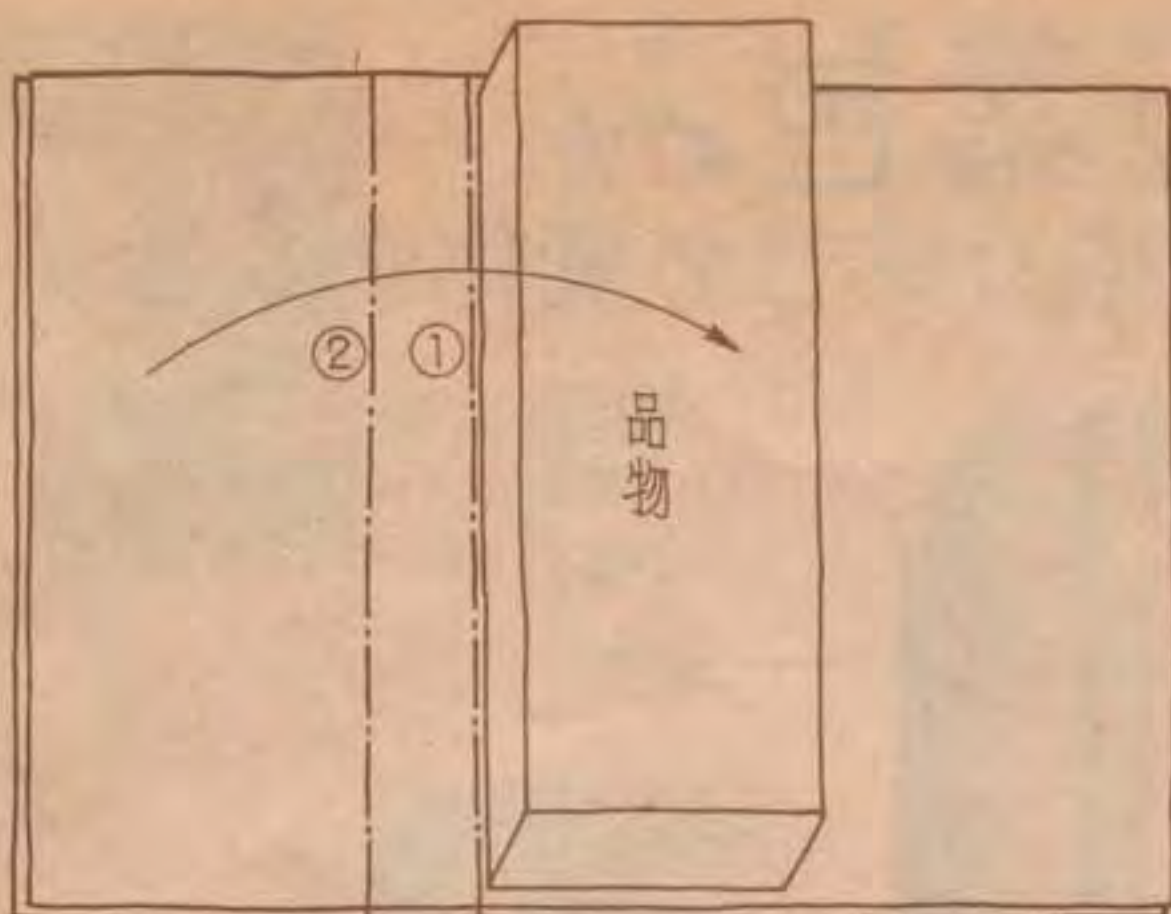
箱などのいろいろな形のものを包む折形を、  
万葉包みといいます。真の包み方が最も格調  
が高く、行、草の包み方がそれに続きます。





# 万葉包み (草)

糊入れを使う場合



仕上がり

## 進物の渡し方

礼法の方式の中に真、行、草の三段階の用語がでてきたのは、江戸中期以後のことです。

漢字の書体に真書と草書があつて、もっとも格式があるものが楷書ともいわれる真書にあたり、草書は気楽な場合にだけ使われました。真書と草書の間位に位する書体を日本では行書といひます。

この書体の分類が、一般にもわかりやすいところから礼法にとり入れられ、相手の身分や格式によつて、少しずつ違えていく説明用語になりました。

贈り物を手渡しする場合は、折形で金品を包み、三方か盆にのせて、相手のほうに向かって差し出します。

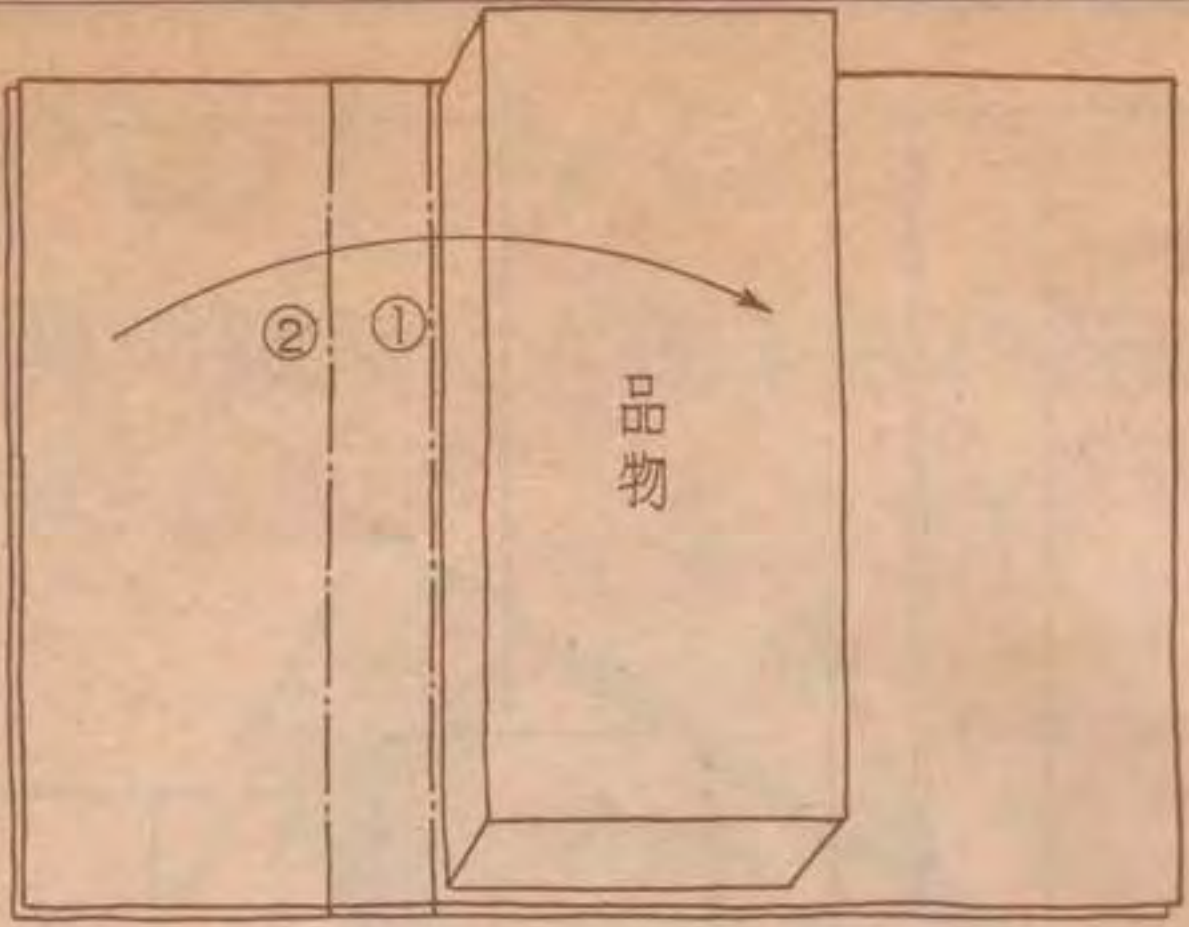
茶の湯で「茶袱紗」を使うようになってから、これを流用して、少し大きめの「掛袱紗」を進物の上に掛けて持ち歩くようになりました。

袱紗は、あくまで道中のホコリ除けのものですから、そのまま相手に渡すのは失礼です。はずしてから相手に差し出しましょう。

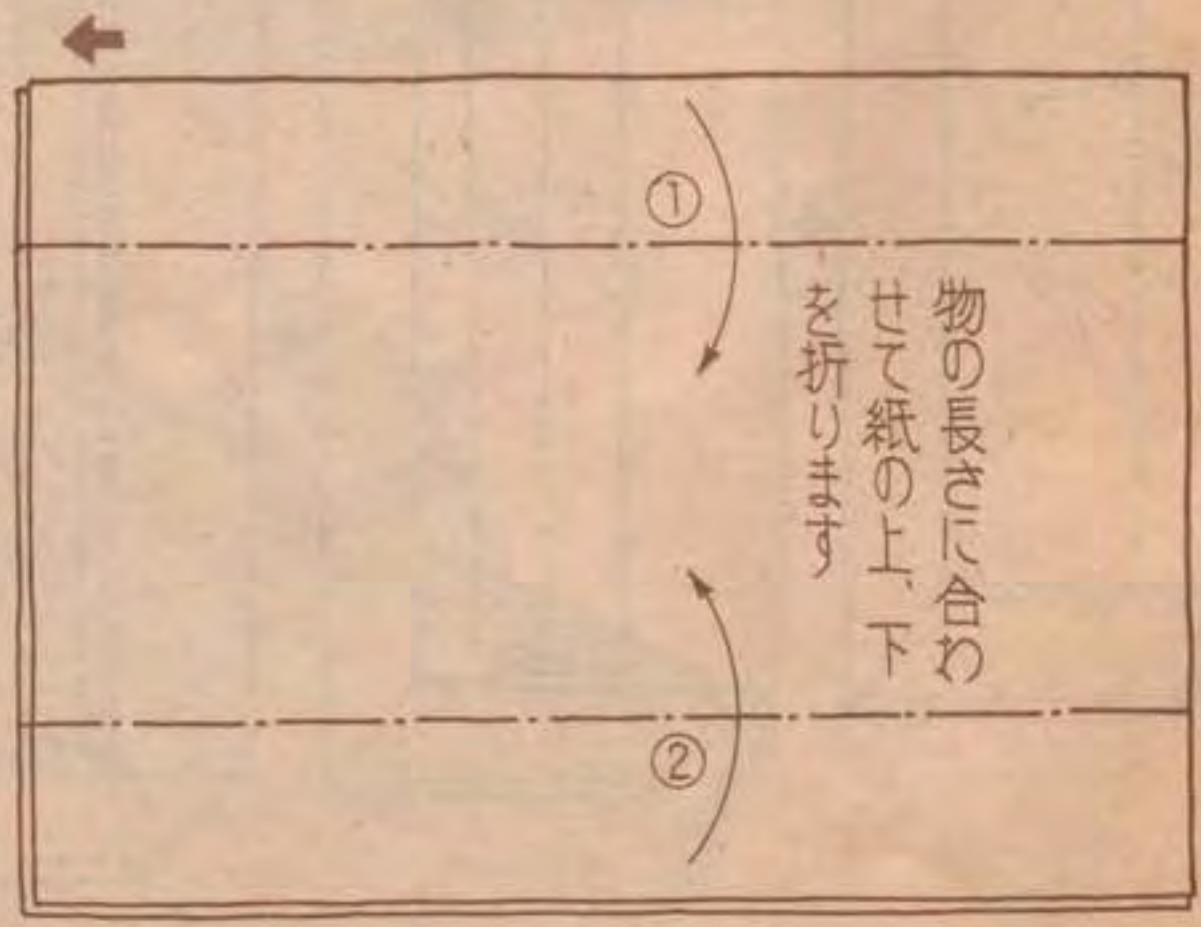
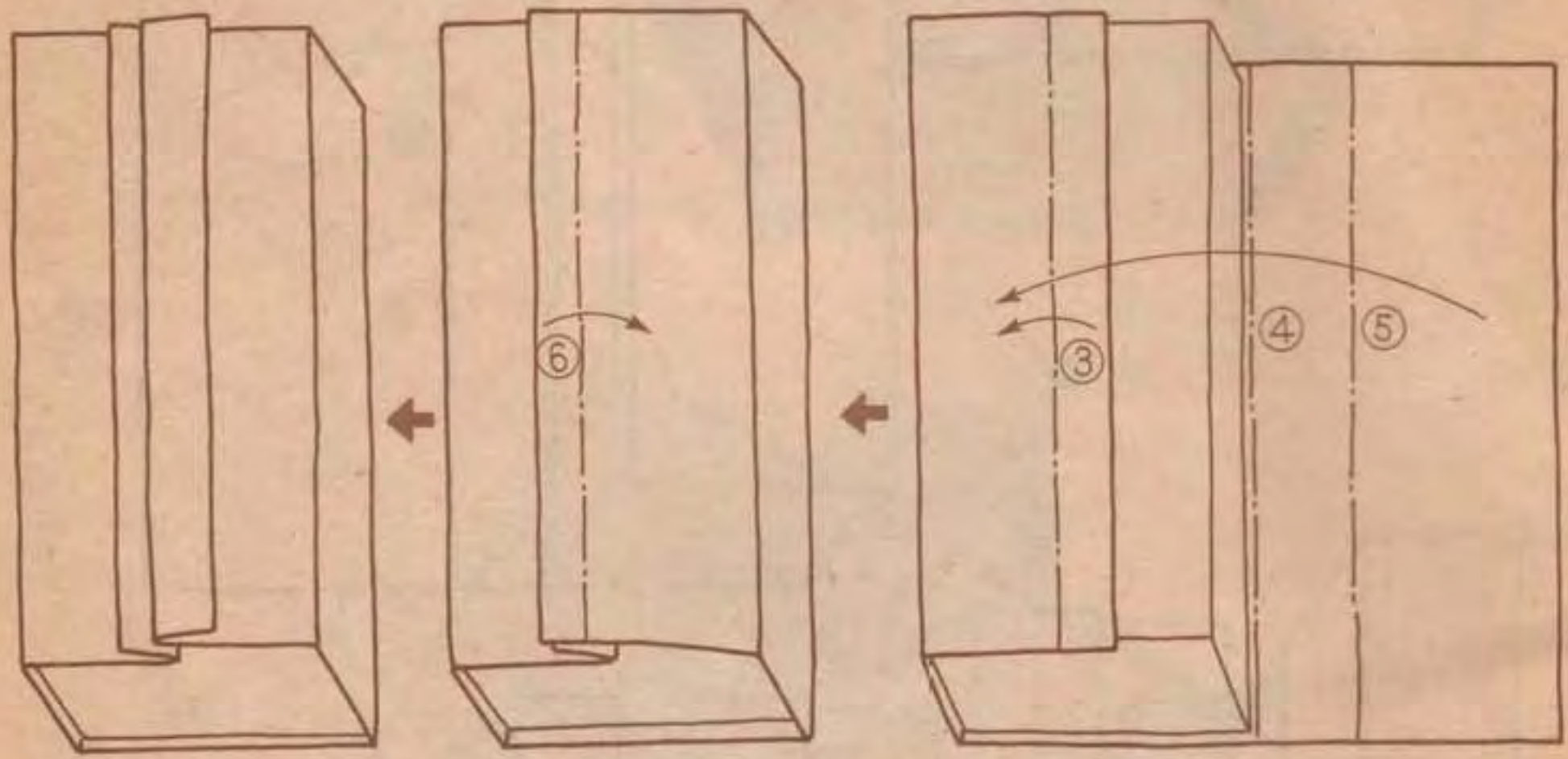


万葉包み (行)

糊入れを使う場合



仕上がり





万葉包み (真)

襷紙を使う場合

